

## Lyrical Ballads 再読(その2)

— “Ruth” を Edmund Spenser, *The Faerie Queene* と William Bartram, *Travels* から読む —

河 村 民 部

(1)

放浪の女 “The Female Vagrant” (以下、「女放浪者」) の場合、ほとんどが主人公の女による独白であるのに対し、“Ruth” (1799、以下「ルース」) では語り手 “I” による三人称の物語となっているのが特徴的である。それだけに女主人公の主観が抑制され、むしろ語り手 (この詩の場合は詩人自身) の主観が支配的となっている。特に物語の最後を締めくくるスタンザでは、語り手による女主人公ルースへの思い入れが溢れんばかりに注がれており、ワーズワスの詩にしては珍しいほどの感情移入が見られる。

はじめに物語を語られる順を追って概観する。

7歳前に母を失い、父が再婚して独りぼっちになったルースは、谷や丘を一人さまい歩く少女になった。「女放浪者」でも母は恐らく早くに亡くなっているようで、詩の中には母の眠るお墓に別れを告げる場面のみが出てくるだけで、母は不在である。だが「女放浪者」では娘は父に大切に保護され少女期を過ごしているのに対し、「ルース」では、母の亡き後父親は再婚して、娘を無視しているし、再婚の相手の母はその影にすら言及されてはいない。二つの詩とも父が出てくるが、扱い方は正反対である。これに対して、男に捨てられた放浪の女シリーズの “Her Eyes Are Wild” (原題 “The Mad Mother”) (1798、「女の眼は狂気に満ちて」) および “The Thorn” (1798、「サンザシ」) では、父の姿はなく、逆に母だけがクローズアップされている。

だが、いずれの場合も子どもの片親は、父であれ、母であれ、子どもを幸せにはできない運命にある。幸せにできないどころか、場合によっては、“An Evening Walk” (1787-89、「夕べの散歩」) の場合のように、二人の幼い子どもは母とともに

に放浪の途上で命を落とすことにもなる。ふた親と子どもが揃った光景は、ワーズワスの詩ではめったにお目にかかれない。*The Prelude* (1805、『序曲』)では、バターミアのメアリとその赤ん坊(亡くしてしまう)、ロンドンの場末の劇場で見かける母親と赤ん坊(その後どうなったのか知れない)などもそうである。唯一両親と子どもが一緒の場面は、*The Excursion* (1814、『逍遙』)の最後に一行が揃って丘に登り、夕べの雲の競演を見て、祈りを捧げる場面である。

片親と子ども、両親と引き裂かれる子ども、こうした不幸な例は、当時の時代が生み出した悲劇的社会状況——人口の急激な増加、仕事の供給が必要に追いつかないこと、農作物の不作、土地を追われた貧民の放浪などによる<sup>(1)</sup>——であると同時に、ワーズワス個人の幼くしての母親喪失とそれに続く父親喪失、そして妹とも離ればなれになって他人に預けられるという孤独な経験の投影でもあろう。

話を物語に戻そう。一人ぼっちの少女ルースは麦笛 (that oaten pipe, 8)<sup>(2)</sup> を作ってはあらゆる風と水の音を鳴らし、野原に東屋を作ってはまるで「森の子ども」(An Infant of the woods, 12)のように遊んだ。(森と子どもの関係については、「女の眼は狂気に満ちて」の場合の女が嬰兒を連れて入っていく森および“The Idiot Boy” (1798、「白痴の少年」)の主人公が父親を探して入って行く森との比較も含め、後ほど本論(2)の中で論述する。)

そうしているとき、軍隊用のヘルメット (A military Casque, 14) にインディアンの羽根飾り (splendid feathers, 15) をつけた若者が、アメリカのジョージア州の港から海を渡ってイギリスにやってきた。その羽根飾りはそよ風に靡き、“a gallant crest” (24) をなしたとあるが、“gallant” は「飾り立てた」という古い意味のほか、「立派な」あるいは「色事の」という意味があり、さらに“crest” は雄鶏の鶏冠であるから、これらはファリックシンボルとしてのコノテーションを十分に示唆している。これにルースは心を奪われるが、これは E.M. Forster の *The Room with a View* (1908、『眺めのいい部屋』) に出てくるルーシーが見上げるフィレンツェの広場の夕日に輝く塔や、Thomas Hardy の *A Pair of Blue Eyes* (1873、『青い眼』) のエルフリードが登る塔を思い起こさせる。これらの塔はいずれも性へのイニシエーションのシンボルの役割を果たしている。<sup>(3)</sup>

この若者はアメリカが英国から独立を認められたとき、つまり 1783 年頃に海を

渡ってやってきた兵士 (bore a soldier's name, 27) であるというのが、アメリカ人であるからには、せっかく自国が英国から自由になったのであれば、わざわざ英国に来る必要はなさそうであるが、ジョージア州のある港からやってきたと語り手はいう。しかもある港がどこかについて語り手は特定していないが、1819年に大西洋を横断した最初の蒸気船 Savannah 号の母港・同航海の出航地であることから、このジョージア州の東部の港町 Savannah ではないかと思われる。この若者像の造形でワーズワスが参照したテキストが William Bartram, *Travels Through North and South Carolina, Georgia, East and West Florida, The Cherokee Country, etc.* (Philadelphia, 1791) であることは、ワーズワス自身が自註していることから知られるが、若者が英国に来た理由および若者の氏素性について、後ほどこれらの謎の解明に資すると思われる個所を具体的に取り上げ論証する。この本は Thoreau, Emerson, Cooper, Chateaubriand, ワーズワス、そして “Kubla Khan” (1797) の創作上 Coleridge がそのみずみずしいイメジャリーにたいそう惹かれた書物であり、*Walden* (1854、『森の生活』) が書かれるまでのアメリカのネイチャー・ライティングのもっとも影響力のあった書物である。

子ども時代にこの若者も月、太陽、小川を友として遊んだ少年だったという。野生のパンサーよりも美しい若者、また遊びにおいてはイルカを凌ぐほどの陽気さを見せたであろうとも語り手は推測しているが、この若者の友となった自然はルースの慣れ親しんだ英国の穏やかな自然ではなく、米国南東部の熱帯的な荒々しい、情熱を掻き立てるような自然であったことが、やがて後ほど語られることになる (cf. ll. 55-78)。

若者はインディアンとも戦った話や、イチゴ摘みに出かけるインディアンの乙女たちの話、あるいは一日に何度も色を変える花、モクレン、糸杉、丘いっぱいを緋色に染める花など、米国南東部の珍しい熱帯植物の話、あるいは緑の草原、無数の小島を浮かべる無限の広がりを持つ数々の湖の話 (Bartram の *Travels* に基づくものであるとワーズワスが自註しているのは、これらの言及についてであるが、原書に当たってみると、まさにそのように描かれていることが分かる。これについても後ほど本論(2)で論じる) ——これらの楽しさと恐怖の入り混じった話は、恐らくワーズワスを魅了したであろうように、そして実際にこの書物を読む読者を魅了す

るように、たちまちルースを魅了してしまう。

そして若者は今いるような「悲しみの世界」(“a world of woe,” 84)ではなく、自分が自由に放浪してきた自然こそ理想であることを語り、また子どもに対する父親の愛についても仄めかしながら、ルースに森で鹿を追って自由に暮らす伴侶になってくれと求愛する(“My helpmate in the woods to be,” 92)。ここでも若者は自由の象徴として「森」に言及しているが、確かにロビン・フッドの伝説にあるように、森がある種のアージュ(聖域)としての自由を保障された場所であったことは事実である。ただし、この「森」での生活がルースにとって単なる夢に終わり、あとは一人放浪の悲劇を味わうことになるのであるから、幻の、偽りの場所ではないとして批評家 Averill は、この若者の語る物語が、夢物語の地上楽園の話である点を強調し、そのような夢に魅了されるところに悲劇に陥る原因があるとして、ルースの空想を危険なものとする詩人の警告がこの寓話詩なのだとする。後ほど(2)において改めて Averill のこの主張が正鵠を得たものか否かを、森の意味とともに検討する。

一晩泣いたルースは若者と海を渡ることを決意する(なぜ泣いたのかについては、後ほど本論(2)において論じる)。そして教会で結婚の誓いを立てた日はルースにとって人生最良の日であった。森での夫との自由な生活を夢見るルースであったが、その夢を打ち砕くような若者の過去を語り手は暴露していく。

若者が頭につけたインディアン羽根飾りは、かつて男がインディアンの放浪者たち(vagrant bands, 113)と平原を彷徨っていたときの名残りであった。アメリカの南国の荒々しい自然は若者にとっては「危険に満ちた食べ物」(dangerous food, 117)で、「衝動的な血」(impetuous blood, 120)も生まれつきのものであったと語り手は推測する。「危険な」というのは「理性を狂わせる」というほどの意味であり、「衝動的な血」というのは、自然の「常軌を逸した」(irregular, 122)ものこそ若者の本能に一致するもの(A kindred impulse, 124)だとも語り手は述べる。さらに語り手が、美しい木や花が若者の性的衝動(voluptuous thought, 127)を助長したといい、自然の風や星にも人をけだるく(languor, 130)させ官能に狂わせるものがあると語るとき、南国の野性の自然は、ルースが育った英国の静謐な自然とは対照的な性質のものであることがわかる。その一節を引いておく。

Nor less, to feed voluptuous thought,  
 The beauteous forms of Nature wrought,  
 Fair trees and lovely flowers;  
 The breezes their own languor lent,  
 The stars had feelings, which they sent  
 Into those magic bowers. (127-32)

“magic bowers”は、上島氏の編集したテキストの註によると、Edmund Spenser, *Faerie Queene* (1590-96、『妖精の女王』)に出てくる官能の館(第2巻第12篇、69～75節)に基づいているという。スペンサーのこの物語に登場する森と「ルース」における森の関係についても後ほど本論(2)において論じる。

だが美しく気高い体つきの者にはその姿に相応しい「高貴な知性」(noble sentiment, 138)も伴うものだという語り手は、後者が若者にまったく欠けていたというわけではないが、しかし、放浪生活をしてきた仲間、つまりインディアンたちとの交わりで、若者は悪を見すぎたし、影響を受けすぎたという。そうして本来備わっていた道義心を失い、「欲望の奴隷」(The slave of low desires, 147)となってしまうと語り手はいう。

だが若者は自然の寄り添ない優しい心を持つルースを日夜愛した(改訂版はここに若者の氏素性を知る手だてとなる3スタンザ27、28、29 [改訂版では163-180行]の追加があるが、その描写については後ほど本論(2)で述べる)。だがやがて楽しい夢は去り、若者は以前と同じように「無法の」(lawless, 162)生活がしたくなった。それであるとき、船旅に出ようとして(つまりアメリカに帰ろうとして)ルースを連れて海岸に来たが、そこで若者はルースを捨て、姿を晦ましてしまう。

若者に捨てられた苦しみ of 的挙句、ルースは半年ほどのうちに狂気となり (she in half a year was mad, 170)、牢獄に入れられることになった。当時英国は放浪者の増加に伴い、放浪者取締法 (Vagrant law) を制定して、放浪者を取締った。<sup>(4)</sup> 牢獄の中でルースは自分の不幸に小躍りして、歌を歌っては騒いだが、時折は穏やかな気にもなって(つまり記憶が戻って)過去のことを回想することもあった。

こうして9ヶ月間 (three seasons, 181) 牢獄にいたが、苦痛が和らぐと、そこから逃亡した。だが放浪者を気にかける者は誰一人いなかった。野原に出たルースは再び息をつくことができ、頭の水が解き放たれ、故郷の楽しいトーン川の岸辺 (the pleasant Banks of Tone, 190) に戻っていった (トーン川はサマセットシャーの風光明媚な Quantock Hills に近い川で、ワーズワスも一時はここに滞在したことがある)。その森にひとり住むためであった。かつて愛した自然を今もルースは愛し、過去の運命のいたづらを自然のせいにはしなかった。

冬だけは小屋に避難するが、大抵はトーン川の緑陰の下でルースは寝起きした。食べ物に事欠いた時には森から出て、旅人に物乞いをした。ルースの住処を語り手は「緑陰の木陰」(Under the greenwood tree, 192、あるいは beneath the greenwood tree, 203、あるいは her dwelling in the wood, 206) といい、実質上彼女の時は森であった。「森」をめぐるのは、若者が求婚したときに鹿を追って森で暮らそうというときの「森」とともに、別の詩「女の眼は狂気に満ちて」の最後に女が嬰兒をつれて入っていく「森」との比較も含め、後ほど本論(2)で論じる。

だが同時に語り手は、追加された39スタンザ (改訂版では229-234行) では、「寿命が来る前にルースは壊れて年老いているであろう」(Ruth will, long before her day, / Be broken down and old. 230-31) といい、ルースの早死を予想している。

かつて少女の頃吹いていた麦笛 (oaten pipe, 211) は已めて、毒人参の茎 (a hemlock stalk, 214) から作ったフルートを吹くようになった。なぜ麦笛ではなくて「毒人参」なのか? Ernst Emsheimer, “Tongue Duct Flutes Corrections of an Error”<sup>(5)</sup>によると、hemlock flute という笛があったことが記されているが、演奏が難しいので、使われなくなってしまったとある。またギリシャ神話の神プロメシュースは人類に火を齎すのに hemlock stalk に入れてそうしたといわれる。“hemlock” を O.E.D. で引くと、毒草で、強力な鎮痛剤として用いられたとあり、その用例として、Keats の “Ode to a Nightingale” での、“A drowsy numbness pains My sense, as though of hemlock I have drunk.” を挙げ、またかの哲学者のソクラテスも毒人参を飲んで死に至ったと信じられている例として、Blackie, *Self-Cul.* 21 “Plato was twenty-nine years old when Socrates drank the hemlock.” を

挙げている。これらのことから、ワーズワスが hemlock に言及したのは、一つにはそれが苦痛を忘れさせてくれる、あるいは死に至らしめる麻薬鎮痛剤であることと大いに関係があるだろう。これはルースの早死をほのめかすスタンザ 39 が改訂版では挿入されていることとも関係があろう。ルースが若い頃の麦笛をやめ後世毒人参の笛に取り換えた理由の一端がここにあると考えられる。さらに詳しくは本論(2)で論じる。

語り手の“T”自身も、ルースが丘陵の小川のそばで子どもの頃のように「おもちゃの水車」(her little water-mills, 218)を回しているのを見かけたことがあるという。こうしてルースは子どもに還っていった(A young and happy Child! 222)。

最後のスタンザで、語り手はルースが死んだら皆できっと教会墓地に埋めて、弔いの鐘を鳴らし、賛美歌を歌ってあげるよと結ぶ。このような優しい語り手の言葉はワーズワスの他の放浪者を扱った詩には見られない。読者は思わず涙を誘われる。

ルースの原型はワーズワスの妹 Dorothy だと上島氏は註解している。上島氏は、晩年に狂気になって子どもに帰ってしまうドロシーの姿をこの最終連は予表しているかのようだと述べているが(101)、この最終連には他にないワーズワスの優しさが現われ出ているのがこの詩の特徴である。

もう一つこの詩で特徴的なのは、この詩にはルースを第二の幼児期に立ち戻らせただけで、いつものワーズワスがやっけてのける子どもの「永遠化」が作用してはおらず、逆に“Farewell”と別れを言ってさえいる点である。なぜか?それだけでは足りずにか、さらにキリスト教による慰めで、ルースを聖化してさえいる。なぜか?一つには、「女の眼は狂気に満ちて」や「サンザシ」による手の込んだ「永遠化」を施すには、ルースはあまりにも身近な存在であったのではないかと思えるからである。ルースはやはりワーズワスの愛したドロシーが原型なのであろう。その最終連を引用しておく。

Farewell! and when thy days are told  
Ill-fated Ruth! In hallow'd mold  
Thy corpse shall buried be,  
For thee a funeral bell shall ring,  
And all the congregation sing  
A Christian psalm for thee. (223-28)

(2)

さて、「ルース」の概観をしてきたが、以降上述した際に問題として取り上げておいた諸点の解明を試みる。まず本論(1)で何度か言及した〈ルースと森〉との関連で、「女の眼は狂気に満ちて」における森および「白痴の少年」の主人公が父親を探して入って行く森との比較も含めて、論じることから始めたい。

「女の眼は狂気に満ちて」に出てくる意味深長な「森」の意味をめぐっては拙論<sup>(6)</sup>でも述べたので詳しくはそちらを参照願いたいだが、その森は、一つには、〈夫の不在・死〉を示唆する場所であった。その拙論では取り上げなかったが、ワーズワスの愛読書であったスペンサーの『妖精の女王』第一巻第6章(21-23)に言及される森も考慮する必要があるように思う。その森はユーナ姫が匿われるサターの森である。「ラプライドの娘で美女のサイアミスという優しい乙女」<sup>(7)</sup>と森の神サターとの間に息子サー・サティレインができるが、サイアミスにはもともと夫セリオンがいたが、この男は森でのハンティングの方にご執心で妻を放りばなしにしていたので、女は欲望を満たすべく森に出かけ、野獣のサターの欲情からその獣性の奴隷となった。

ワーズワスの「白痴の少年」では、白痴の少年の父親はやはり森に出かけていて留守である。白痴の少年が母親の使いで月夜の夜道を町に医者を呼びにやられるが、いくら待っても帰ってこない息子を心配した母親が探しに来るのが森で、母親はひょっとしてそこに父がいるから息子が無意識の内にそこに行ったのではと思いやってくるのであるが、そこには父親の姿はない。ワーズワスはただ「森へ行っている」というだけで、それ以上父親のことは何も語らない。



今問題にしている「ルース」においても、概観したように、ルースをアメリカに連れて行き、森の楽園で鹿狩りをして暮らそうとって結婚したアメリカから来た野性の男も、舟の出る港まで来ると突如その姿を消してしまい、二度と再びルースの前に現われることはない。そしてルースは牢獄で恐らく死産で子ども産み、そこを脱け出して帰ってくるのが生まれ育った自然の森である。そこで狂気から再び第二の幼年時代に回帰し、子どもの頃吹いていた麦笛の代りに今や毒人参の笛を吹きながら暮らしている。

このように見てくると、『妖精の女王』のサイアミスがサターと交わるべく入っていく森、〈夫の不在の森〉という森の性格付けが、ワーズワスのこれらの詩の「森」が示唆する特殊な意味と関連があるように思われる。そもそも「ルース」は、そのテーマにおいて、スペンサーの『妖精の女王』に極めて近いといっても過言ではないからである。少女ルースは第一スタンザから第三スタンザにかけて小妖精フェアリーの姿を髣髴させる存在として描かれている——第一スタンザでは、「一人ぼっちの子どもで、思いのままに / 谷を越え丘を越えさまよった / 何にもとらわれず勝手気ままに」(The slighted Child at her own will / Went wandering over dale and hill / In thoughtless freedom bold.) と描写され、続く第二スタンザの麦笛であらゆる風や水の音を奏で、草原に東屋を作る「生まれつきの森の子ども」(An infant of the woods) は、ルースの妖精的特質をさらに強調している。第三スタンザでは、父親と同居してはいるが、「ひとりで生きているようだ」(alone / She seemed to live) といわれ、すべてにおいて一人で自足した少女、否、妖精が、やがて乙女となるに及んで、新大陸から来た若者、つまり人間に出会うことになる。

このように見てくると、スペンサーの『妖精の女王』のテーマ——若きアーサー王が夢に現れた妖精の女王を探し求め妖精の国、つまりイングランドにやって来る——と図らずも軌を一にしていることがわかる。この後述べるが、批評家 Markley はチョーサー (Chaucer) の『カンタベリー物語』(Canterbury Tales) 中の「サー・トパス物語」(“Tale of Sir Thopas”) を取り上げ、騎士サー・トパスが妖精国の女王に求婚するべく旅立つという点で、「ルース」のテーマとの類似を指摘しているが、そのことも併せて考えると、「ルース」は『妖精の女王』と深い

繋りがあるように思えてくるということをはじめに指摘しておきたい。

この詩に関する論考は、一連の放浪女シリーズの一篇というだけで、詳細に論じられたものは、寡聞にして知らない。ただ、最近この詩を取り上げた比較的短いものだが、興味深い論考を見つけたので、それが問題視している点を取り上げ検討することで、以下この詩に関するさらに深い洞察を試みたい。

それは A.A. Markley による “Wordsworth’s Ruth”<sup>(8)</sup> という題名の論考で、『抒情民謡詩集』の中でもこの詩は最も無視されてきた詩のひとつであるが、同時代の田舎の生活を表現するというワーズワスのこの詩集の目的を見事に具現した詩であり、無視と孤独と家庭の剝奪は悲劇的な精神異常と早死をもたらすというロマン派の詩人にとって最大の関心事を描いた悲劇的な物語であるといい、この詩が如何に予想を裏切るほどの近代的でリアリスティックな詩であるかを強調している。

この論考で特に着目したいのは、まず “Ruth” という題名の語が多義性に富んでおり、“pity”、“sorrow” という意味から “grief”、“calamity” そして “ruin” にまで及ぶということ、また旧約聖書の「ルツ記」にある物語ではヘブライ語の “ruth” が “companion” を意味し、物語そのものが連れ合いとその喪失にかかわるものである点もこの詩と関連しているという指摘である。

確かに、ワーズワス詩のルースは、旧約の「ルツ記」に登場するルツ（ルース）が結婚した夫に死なれ、夫を失うという点では同じであるが、旧約のルツが姑のナオミに従ってベツレヘムに赴き、最後までナオミの傍を離れようとしない貞淑を買われて、そののち再婚して幸せになるのに比して、ワーズワス詩のルースは、聖書のルツとは全く正反対の人生を歩むことになる。この点では二人のルース（ルツ）は全く異なった結果に終わっている。もう一人、Mrs. Gaskell, *Ruth* (1853) の主人公との比較も興味あるテーマだが、これは別の機会に譲りたい。

さらに Markley は、この詩がースタンザ6行からなる尾韻詩、いわゆる “Romantic six” という中世ロマンスで流行した詩形であり、チョーサーがこの詩形を用いて書いた「サー・トパス物語」におけるあまり信用できない語り手の存在もワーズワスのこの詩の語り手を予期させるという。後者の詩の語り手はルースの物語への不揃いなアプローチに異常な選択を時折見せているからだとして、若者に捨てられるときの物語の転換点の語りの進行があまりにも急激でクライマックスを

駄目になっていることや、物語最後にキリスト教を持ち出してルースの死を弔うという民謡やバラッドにお決まりのエンディングを用いたお涙頂戴は、それまでの物語の調子にそぐわない点を指摘し、語り手の気まぐれを批判的に見ている。確かにチョーサーの「サー・トパス物語」の主人公がドン・キホーテ的人物で、妖精国の女王に求婚するために旅立つという点では、ワーズワス詩のアメリカから来た若者のモデルを提供しているともいえる。だが、Markleyはこの物語の枠組みが、筆者が上述したように、スペンサーの『妖精の女王』の枠組みに結びつくものであることは看過している。

さて、詩の内容に関して、Markleyの指摘の中で興味深いのは、特にルースが牢獄の中で過ごす“three seasons”を9ヶ月だとして、これはルースが出産に要した期間と解釈できるのではないかとする点である。だが、こう解釈するには問題がある。女が入牢する前までには、若者に捨てられて「半年」してから気が狂うという経緯がある。この半年という期間こそが女の妊娠期間だと思われるからだ。「サンザシ」における狂女 Martha Ray の場合が参考になる。マーサは婚約者 Stephen に捨てられてから半年間お腹に子どもを抱えて山を放浪している。ルースもおそらく懐妊しているとすれば、若者の子どもを宿していると思われる。牢獄に入ってから後で誰かの子を孕んで、9ヶ月して子を産んだというわけではなかろう。したがって“three seasons”を妊娠期間の9ヶ月と解釈するには問題がある。だが、牢獄に“three seasons”いたのち、“There came a respite to her pain” (182) とあるのは、ルースが牢獄で若者の子どもを産んだ証左と見ることもできる。

もう一点、上述したこの詩の最後のスタンザを巡っての Markley の言い分の検証である。語り手の最後のスタンザのお決まりの文句は、ルースの悲劇的な人生を語ってきたこの詩の他の部分とはそぐわない、おざりなエンディングだというのである。騙されたルースにとってキリスト教による埋葬や葬儀が如何なる慰めを齎すというのか——語り手は果たしてルースの人生と彼女の蒙った出来事を正しく理解しているのかどうか疑われるからだという。

この点は、Markley が筆者同様に着目しているルースの吹く笛の種類の変化と深く関係している。先述したように、ルースは最初麦笛 (oaten pipe, pipe of straw) を吹いていたが、最後には毒人參 (hemlock stalk) のフルートを吹くようになって

た。Markley は毒人参のフルートは古代ギリシャの “flute-songs” や “elegies” によって「嘆きの歌」を連想させるという。そして彼は「自然」はルースの回帰する対象ではあるが、それは人間社会の代用にはならないといい、先述したように、社会が人を無視し、孤独に追いやり、家庭を剝奪すると——これが当時の現実であった——人は悲劇的な精神異常と早死に至るということを描こうとしたのが、この詩であるとして、この詩を高く評価する。

筆者は、この詩の語り手の最後のルースへの慰めの言葉がワーズワスの他の詩には見られないほどのやさしさの由来を、ルースのモデルがワーズワスの妹ドロシーだからだといい、またルースの第二の幼児期への回帰がドロシーのそれを予言するものであるという上島氏の解釈を引用した。だが、確かに、この論者が言うように、「自然」は「人間社会」の代用にはならない。人間社会がルースのような、今の言葉で言えば、認知症患者を救済しないから、ワーズワスは「自然」に治癒してもらおうべく、自然回帰を実行するのである。

ルースの吹く笛についてももう少し論じておきたい。実はワーズワスの愛読書の一つ Walter Scott の編集による *Minstrelsy of the Scottish Borders* (『スコットランド民謡集』) におけるバラッド “The Young Tamlane” の第 55 連には、麦笛と毒人参の笛が同時に出てくる——

Their oaten pipes blew wondrous shrill,  
 The hemlock small blew clear;  
 And louder notes from hemlock large,  
 And bog-reed struck the ear;  
 But solemn sounds, or sober thoughts,  
 The Fairies cannot bear. (LV) <sup>(9)</sup>

このように、麦笛と人参笛が並列されているが、このコンテキストでは、以下に述べるように、いずれもが陽気な歌を奏でるもので、まじめな歌や思考の伴奏ではない。すると、麦笛も人参笛もともにルースにとっては、最初から彼女の孤独および苦悩を忘れさせるための道具であったのであろうか。翻ってこのコンテキストを

含むバラッドの内容を概観し、この場面における笛の持つ意味を特定すれば、ワーズワス詩の解釈が新たな局面を見せるかもしれない。

“The Young Tamlane” というバラッドでは、スコットランドの Etrick 川と Yarrow 川が合流する地点の平原 Carterhaugh がその舞台で、編者のスコットによると、この地域は特に妖精 (fairies) 信仰が強いところだという (326)。バラッドの内容はこうである。この Carterhaugh を通ると乙女は必ずマントか、金の指輪か、さもなければ乙女の印を差し出さずにはすまないといわれている。それを無視して麗しのジャネット (fair Janet) は、ここは自分の父親の地所だからといって出かけていくが、案の定、その名を Tamlane という妖精の若者に誘惑されて身籠ってしまう。気丈なジャネットは父親や知人の心配をよそに再びこの若者に会いに Carterhaugh に出かけると、Tamlane から実は自分は彼女と幼馴染の仲良しの伯爵の息子だと告げられ、9歳のときに伯父に連れられて出かけた狩りで眠りこけて落馬したところを妖精に連れ去られ、以来フェアリー・ランドに棲んでいるが、今年には妖精が地獄に年貢を支払うべき7年目にあたり、妖精の女王はよく肥えた彼を生贄に捧げようとしているので、もしジャネットが彼を取り戻して生まれてくる子どもの父親にしたければ、今夜ハロウィーンの真夜中に Miles Cross まで来るようにという。そして妖精の騎馬行列が通り過ぎるときに、白い馬に乗った彼を引き降ろしてしっかりと掴まえておけという。するといろんなものの姿に変身させられるが、危害はないので、しっかりと掴んでいれば、最後には裸の男になるので、緑のマントで覆ってやれば、取り返されずに済むという。ジャネットは言われたとおりの場所に行くと、言われたとおりのことが進行していき、最後に Tamlane を無事取り戻すことに成功する。

さて、問題の麦笛と人参笛が出てくるのは、ちょうどジャネットが若者を取り戻そうと待っているときに馬に乗った妖精の一行が陽気に笛を吹きながら通りかかる場面である。引用にもある通り、妖精の一行は乱痴気騒ぎに興じているので、真面目腐った陰気な歌は願い下げなのである。その彼らの陽気さを煽るのが、これらの笛というわけである。

ところで、バラッドのジャネットの場合、妖精となった幼馴染の恋人に孕まされるが、彼を妖精の手から取り戻すことに成功する。だがワーズワスのルースは、

チャーサーの「サー・トパスの話」によると、妖精の妻捜しにやって来たのが人間だということになるが、その人間に孕まされ、そのまま捨て去られることになる。これはバラッドの場合とは全くの逆ヴァージョンである。バラッドでは妖精が男で、孕まされる女は人間であるのに反して、ワーズワスの詩ではルースはいわば人間の男の求める妖精の女に仮託されている。バラッドでは、妖精に変身させられていた男は元の人間に戻ることで、二人は無事夫婦になるが、ワーズワスの詩の場合、再婚した父親から無視された少女は、「森の子ども」となってしまった、つまり妖精となってしまった。これを求めて人間が新天地からやって来る。そして妖精ルースを見つけて孕ませるが、いざ人間世界へ船出という途端に人間の方が姿を晦ますことになる。そうして残された妖精ルースは人間になり損ね、元の森を彷徨うことになる。

以上が、バラッド “The Young Tamlane” を下敷きにして読んだ場合の「ルース」解釈となる。そうするとルースが吹く二つの笛、麦笛も人参笛もともに陽気な音を響かせる妖精の笛ということになるのではないか。親に無視された子どものときも、男に捨てられ、嬰兒を失った今もまた、ルースは妖精の笛を吹いている。ルースが結婚を承諾する夜に涙を流したという文句は、このようなコンテクストからすると、妖精の世界を去って人間の世界に行こうと決意したからではなかったかとも想像されるのである。

つづいて、先に言及しておいた James H. Averill による「ルース」解釈に移ろう。Averill は *Wordsworth and the Poetry of Human Suffering* の中で、「ルース」という詩は「自然を愛する心を自然が裏切る寓話」(a parable of Nature's betrayal of the heart that loves her, 204) であり、また「想像力の引き起こす危険」(the dangers of the imagination, 204) についての物語であるという。<sup>(10)</sup> Averill のいう「自然」とは、この詩では、アメリカからやってきた若者が語るアメリカ熱帯の地上楽園の自然のことであり、その語りに魅せられた女はちょうどデズデモーナがオセロの武勲話に魅せられるように、若者の語る地上楽園の自然に魅せられ、その結果悲劇に陥ることになる。だからワーズワスはこの詩を地上楽園を夢見、想像することの危険を示唆する寓話として書いたと Averill はいうのである。

また若者が彼女を誘惑し求婚する際に女が流す一筋の涙の滴は、アメリカに渡っ

て鹿を追いかける森の狩人の生活に同意する夢が孕む「攻撃と破滅」に自らが関わりを持つことをおそらく察知したことのためであろうと Averill は述べ、このテーマはワーズワス詩 “Hart-Leap Well” (1800) の主題として発展することになるという。「ルース」では鹿追いが実現したわけではないが、後者の詩ではその夢を追いかけることが他者の苦悩を引き起こすことに結びついてくるからだという (213-14)。

Averill の解釈は示唆的であるが、はたしてワーズワスが夢見るような想像力に身を委ねることの危険を示唆する寓話としてこの詩を書いたのかどうかは、再検討する必要がある。確かに若者の語る夢物語は乙女には “perilous” である、つまり抗し難い危険な話であるとも語り手は述べてはいる。だが、ワーズワスがルースの夢見る想像力が招く結果の悲劇を警告する寓話としてルースを不幸におとし入れるのだとすると、物語の最後でルースを第二の幼児期へと回帰させ、それでも足りないかのように、キリスト教の葬儀と天上における魂の永遠を示唆して、女を慰めようとするのは、なぜかという疑問が残る。

また Averill は、ワーズワスが野生の社会で育っていたらなっただであろう彼自身の姿の投影がこの若者だとする Mary Moorman (ワーズワスの伝記作者) にも言及しているが、詩そのものの中でのこの若者の氏素性がもうひとつよくわからない。「ルース」の改訂版では、字句の修正のみならず、スタンザまでが数スタンザ追加されているが、その中でも 28、29、30 の三つのスタンザは若者がなぜアメリカからイギリスに渡ってきたかについて曖昧な描写であるため、その目的を特定できない。謎の三スタンザである。

だが、この謎を解く歴史的事実がある。独立戦争で勝利を収めたアメリカが「戦い」(battle) と「危険」(jeopardy) から自由になったときに、若者はイギリスに來たと語り手はいう (第5スタンザ)。本来ならば、独立を果たして自由な国となったアメリカからわざわざ若者は支配国イギリスに來る必要はなかったのではないかと思われる。だがこのアメリカの独立戦争とその直後の歴史的現実および事実を知らなければ、大変誤った解釈をしてしまう。このことはアメリカ歴史の、いわば、恥部に当たる個所であるから、公にはされないが、実は、独立戦争では、アメリカ人の中にもイギリス王党派の者とアメリカ独立派の者が二手に分かれていたと

いう事実にもまず注目する必要がある。戦後イギリスに加担した者は、独立派の者にひどい仕打ちを受け、女はレイプされ、土地の争奪戦が起こった。まさに戦後アメリカは「混沌」に化した時があったのである。それで多くの王党派の人々はカナダやイギリスに逃げていった。この詩の若者も恐らくその一員であったと思われる。<sup>(11)</sup>

1775年からはじまり1783年までの長きにわたるこの戦いの中で、疫病と餓えで家族全員を失ったある女放浪者は、正気に戻ると英国船の船上にいた。女は、しかし、軍隊が侵入してきて、殺人とレイプが母と子を驚掴みにしたときのおぞまじさが今でもこみ上げてきて体を凍らせずにはおかないと語る。この語り手の放浪の女こそは、ワーズワスが“The Female Vagrant”（「女放浪者」）の中で描いている主人公である。ワーズワスはこうした試練に会って同じような影響を受けた友人の自己告白を忠実に再現した旨を、I.F. Noteの中で語っている。<sup>(12)</sup>

インディアンの中にもイギリスに用兵として雇われていた者も多かったようだ。この若者がインディアンの中でも戦ったというとき、インディアン同士でも敵味方に分かれて戦ったのである。William Bartramの*Travels* (1791)を読んでいると、サウス・キャロライナのある土地を支配するクリーク派のインディアンは他のインディアンと戦い、彼らを追い出したり支配下に置いて最初の町を形成していくと同時に、キャロライナを植民地化しようとして入植してきたイギリス人と折り合いをつける交渉もしたことが述べられているが、<sup>(13)</sup>同じ土着の原住民同士の間でも、このように初めから勢力争いがあり、しかもアメリカの植民地派・独立派の両派に分かれてそれぞれ原住民も争ったのであるから、独立戦争で彼らがそれぞれの陣営に利用されたことは容易に見て取ることができる。

港でルースを捨てて姿をくらました若者の行き先を示唆するものが皆無というわけではない。「鎖」に縛られていたアメリカから「輝く世界」(“a glorious world,” 改訂版169行)のイングランドを見た若者は、一時ルースにやさしく接する(これを描いているのが改訂版の追加の三スタンザ28、29、30)が、これに続く元のスタンザでは、やがて楽しい夢は去り、若者は以前と同じように無法の生活をしたくなったことが記されている。その中に“New objects did new pleasure give, / And once again he wished to live / As lawless as before.” (160-62)とある。問題



にしたいのは、「新たな目的が新たな喜びを与えた」、だから彼は元の無法の生活に戻ったという点である。この「新たな目的」とは一体何か。時代的に見て、これは恐らく1789年のフランス革命の可能性が大である。それに若者は新たな興味を抱いてルースの前から姿を消したのではないかと思われる。ワーズワス自身がフランス革命でフランス女性のアネット・ヴァロン (Annett Vallon) を愛して子どもまで出来ながら、母子を置き去りにせざるを得なかったという痛ましい出来事も、このアメリカの若者がルースを置き去りにした背景に潜んでいるように思われる。

そうなるとうワーズワスのルースへの思い入れが一層深くなっても不思議ではない。この詩が、いつものワーズワスとはトーンの違った調子のエンディングになっていて、<sup>ひとしお</sup>一人読者のルースへの憐憫を掻き立てる所以であろう。

Bartram の『旅行記』を取り上げたので、それに基づいて「ルース」の若者に関する謎を解明するのに参考になる事実を取り上げ、両作品が予想以上緊密な結びつきを持つものであることを論じておきたい。

1774年 Bartram は東フロリダの旅を続けて、Little St. Juan 川沿いにある Talahasochte という Siminole インディアンの町に交易所の主任の一行とやって来て、Sinimoles 族の酋長 the White King に別れを告げて自分たちのキャンプ (野営地) に戻る途中で出くわすのが、7人の同じく Sinimole インディアンの若い戦士で、彼らは猟をしており、近くで同じくキャンプをしているという。この一行を率いているのが若大将で、7人とも Siminole 風の飾りをつけているが、特に注目すべきは彼らが頭につけている羽根飾りである。これを Bartram は、“with waving plumes of feathers on their crests” (208) と呼んでいるが、この表現はまさにワーズワスが「ルース」の中でアメリカの若者の頭を飾るインディアンの羽根飾りに言及するときの言葉を髣髴させる。

さらにこの若大将 (prince or chief of Caloosahatche) の人物を描く著者の筆は、「ルース」のアメリカ人の若者の姿を髣髴させる。引用する。

He [i.e. the young prince] was rather above the middle stature, and the most perfect human figure I ever saw; of an amiable engaging countenance, air and deportment; free and familiar in conversation, yet retaining a

becoming gracefulness and dignity. (208)

おそらくワーズワスは詩の中の若者を造形するに当って、このインディアン像を参考にしたと思われる。また同じ Siminoles の酋長で the Long Warrior というのが部下の戦士を 40 人ばかり連れて作者のいる交易所を尋ねてくる場面がある。今から西フロリダの Chactaws インディアンと戦いに行くが、ついでには毛布やシャツなどを前借したいという。そこで Spalding 会社のこの出張所主任の Mr. M'Latche がそれは会社と相談でないとできないというと、不快感を漂わせ、天の雷をお前たちの頭に落とすこともできる霊力があるのだといって脅しにかかったが、M'Latche がこれに動じないのを見て取ると、気を鎮め M'Latche 氏の要求にしたがつて半分は現金で今支払い、残りは信用貸しでよいという提案で合意に至る (212)。この Long Warrior というのが強力なリーダーで、霊との交信ができるとして仲間に尊敬されている男であるが、その写真が『旅行記』の扉絵にある。そこには既出の若大将の着けているのと同様の見事な羽根飾りが彼の頭を飾っている。『旅行記』はオリジナルの復刻であるから、ワーズワスの読んだ本にもきっとこの写真（エッチング画）が載っていたに違いない。



*Mico Olucco the Long Warrior,  
or King of the Siminoles.*

さらに「ルース」の若者がルースに語るアメリカの自然の中での鹿狩りの暮らしに言及した箇所が『旅行記』に出てくる。

自然の中で狩をしながら放浪生活をする Siminoles 族インディアンにとっては、Bartram の探検している Lake George 周辺 of 自然、とくにスイレンの咲く湾に船を停めた作者の見る自然は、まさに地上楽園に思われる。放浪の Siminoles インディアンが狩をして、そのあと木陰に強い日差しを避けて憩い、風に吹かれ、美しい花や木の香りに囲まれて休んでいる光景——原始の崇高で魅力的な光景——これはまさに「ルース」でアメリカから来た若者がルースに語る「地上楽園」の姿そのものである。引用する。

How happily situated is this retired spot of earth! What an Elysium it is! Where the wandering Siminole, the naked red warrior, roams at large, and after the vigorous chase retires from the scorching heat of the meridian sun. Here he reclines, and reposes under the odoriferous shades of Zanthoxylon, his verdant couch guarded by the Deity, Liberty, and the Muses, inspiring him with wisdom and valour, whilst the balmy zephyrs fan him to sleep.

Seduced by these sublime enchanting scenes of primitive nature, and these visions of terrestrial happiness, I had roved far away from Cedar Point... (106)

この自然は Siminoles 族インディアンにとってのみならず、作者と友人の交易人の白人にとっても、地上楽園に思える。釣ったマスのご馳走になった作者たちは、ここにいると、原始の人間のように、平和に満ち、お互いを思いやる気持ちになり、兄弟同士となり、妬みや悪意などとは無縁の人間になるという。これも続いて引用する。

How supremely blessed were our hours at this time! Plenty of delicious and healthful food, our stomachs keen, with contented minds, under no controul, but what reason and ordinate passions directed, far removed from the seats of strife.

Our situation was like that of the primitive state of man, peaceable, contented, and sociable. The simple and necessary calls of nature being satisfied, we were altogether as brethren of one family, strangers to envy, malice, and rapine. (108-09)

Bartram が自然と人間の交わりこそ地上楽園成就のための必須条件であることを述べた箇所があるが、それはまさにワーズワスの希求する理想の実現した姿でもある。ワーズワスはこれを読んできつと感じ入ったに違いない。「ルース」の中でアメリカの若者が語るこの原始の地上楽園は、イギリスの自然とはその姿は違うとはいえ、一方的にワーズワスによって否定されているわけではないことも、この『旅行記』を読めばわかる。日の出とともに自然が再生する姿を見て、作者がこの自然の創造主に祈りを捧げる場面がある。神の造りたまひし自然の讚美に人間も和すようにという自然からの呼びかけに応える作者は、創造主に対して、願わくば、地上にあまねく平和と愛が満ち、天上界と同様の神々しい調和が齎されんことを祈る。そしてこうした神による人間への恩恵という関係を敷衍して、人間と人間に仕える者との関係にもかくあらんことを作者は願う。Bartram のいう自然と人間の交わりによる地上楽園成就の願望の一節を引用しておく。

At the reanimating appearance of the rising sun, nature again revives; and I obey the cheerful summons of the gentle monitors of the meads and groves.

Ye vigilant and faithful servants of the Most High! Ye who worship the Creator morning, noon, and eve, in simplicity of heart! I haste to join the universal anthem. My heart and voice unite with yours, in sincere homage to the great Creator, the universal sovereign.

O may I be permitted to approach the throne of mercy! May these my humble and penitent supplications, amidst the universal shouts of homage from thy creatures, meet with thy acceptance!

And although I am sensible, that my service cannot increase or diminish thy glory, yet it is pleasing to thy servant to be permitted to sound thy praise; for

O sovereign Lord! we know that thou alone art perfect, and worthy to be worshipped. O universal Father! look down upon us, we beseech thee, with an eye of pity and compassion, and grant that universal peace and love may prevail in the earth, even that divine harmony which fills the heavens, thy glorious habitation!

And, O sovereign Lord! since it has pleased thee to endue man with power and pre-eminence here on earth, and establish his dominion over all creatures, may we look up to thee, that our understanding may be so illuminated with wisdom, and our hearts warmed and animated with a due sense of charity, that we may be enabled to do thy will, and perform our duty towards those submitted to our service and protection, and be merciful to them, even as we hope for mercy. (101-02)

この Bartram の祈りには、多分にキリスト教的色彩が強調されている点は、ワーズワスの初期作品の汎神論的自然観とはやや趣を異にするように思えるが、神の創造した自然の中で人間と自然の交わりを通して地上楽園を成就するという願望では、両者はぴたりと一致しているといつてよい。

一つ前の引用では、狩をして放浪する Siminoles インディアン の幸せの例を引いたが、それとは対照的に、白人の男と結婚した Siminole インディアン の悪女について Bartram が述べているのも興味を惹く。美人のインディアン女に騙され結婚したのはよいが、この女に白人の持ち物すべて巻き上げられ、離婚したくても別れられない白人の哀れな話で、この女の父、つまり白人の義理の父は Siminoles 一族の酋長であるが、自分の娘ながらその悪女振りを嫌悪し、義理の息子に同情し、序に息子の陥っている不幸を涙ながらに語ったというのである。これも「ルース」の逆ヴァージョンの話として興味深いので、引用しておく。

He [i.e. the white man married to a Siminole young woman] is at this time unhappy in his connexions with his beautiful savage. It is but a few years since he came here, I think from North Carolina, a stout genteel well-bred man,

active, and of heroic and amiable disposition; and by his industry, honesty, and engaging manners, had gained the affections of the Indians, and soon made a little fortune by traffic with the Siminoles: when unfortunately meeting with this little charmer, they were married in the Indian manner. He loves her sincerely, as she possesses every perfection in her person to render a man happy. Her features are beautiful, and manners engaging. Innocence, modesty, and love, appear to a stranger in every action and movement; and these powerful graces she has so artfully played upon her beguiled and vanquished lover, and unhappy slave, as to have already drained him of all his possessions, which she dishonestly distributes amongst her savage relations. He is now poor, emaciated, and half distracted, often threatening to shoot her, and afterwards put an end to his own life; yet he has not resolution even to leave her; but now endeavours to drown and forget his sorrows in deep draughts of brandy. Her father condemns her dishonest and cruel conduct. (109-110)

このようにこの白人とインディアン女の関係は、「ルース」の逆ヴァージョンとあってよいし、またシャーロット・ブロンテ (Charlotte Brontë) の *Jane Eyre* (1847) の狂女 Bartha を思い起こさせさえする。序ながら、作者 Bartram はこの女の例を以ってインディアン全体の道德律を非難するどころか、逆に弁護して、彼らは一般には “untutored” (「無教育」) などではなく、部族の名誉と名声を重んじる立派な道德律と慣習の持ち主であるという。

以上のように Bartram の『旅行記』には、作者の旅の主たる目的である自然観察による貴重な物の採取の話のほかに、こうした話の脱線として、彼の出くわした人間と自然を媒体に彼の人生哲学や自然観が語られていて、尽きない興味をそそる。そのような点がワーズワスやコールリッジその他の自然讚美者の注意を惹きつけたのであろう。

Bartram の『旅行記』の中で「ルース」との関連でもう一つ注目すべき場面がある。アメリカの若者がルースに語るインディアンの乙女のイチゴ狩りの場面であ

る。

Bartram は 1775 年 4 月 22 日に Charleston を馬で発って、Cherokee インディアンの居住地区であるチェロキー山脈を越えた町 Cowe に至ると、その交易人に案内されて彼の飼育している馬を見に出かけた帰りに出くわすのが、イチゴ狩りにやってきている「木の精」(hamadryades) と見まがうばかりのインディアンの純粹無垢な乙女たちの姿である。イチゴ狩りに夢中な乙女もいるかと思えば、摘み終わって花陰に憩っている者もあるし、冷たい流れに手足を浸している者もあり、またふざけあっている者もある。若い男には長く見つめていられないような乙女たちの魅力的な姿であるから、理性をかなぐり捨てて自然の本能のままにこれらのニンフに近づかないではいられなくなると作者はいう。そしてイチゴをもらってひと時をこの「地上楽園」(these Elysian fields, 292) で過ごすのだが、この場面は「ルース」の若者がルースに語るインディアンの乙女のイチゴ狩りの遠出のエピソードの基になっているとってよいだろう。敬虔な Bartram にしては珍しい自然の本能をくすぐる描写である。

Companies of young, innocent Cherokee virgins, some busy gathering the rich fragrant fruit, others having already filled their baskets, lay reclined under the shade of floriferous and fragrant native bowers of Magnolia, Azalea, Philadelphus, perfumed Calycanthus, sweet Yellow Jessamine and cerulean Glycine frutescens, disclosing their beauties to the fluttering breeze, and bathing their limbs in the cool fleeting streams; whilst other parties more gay and libertine, were yet collecting strawberries, or wantonly chasing their companions, tantalizing them, staining their lips and cheeks with the rich fruit.

The sylvan scene of primitive innocence was enchanting, and perhaps too enticing for hearty young men long to continue idle spectators. (291)

こうした描写を読むと、ワーズワスが一方的にアメリカの若者を地上楽園という夢の幻想を語る誘惑者としてのみ位置づけていたのではないことが推察されよう。若者がルースを置き去りにしたのは、それ相応の理由があったことが想像で

きる。ただ、ワーズワスは具体的にそれを書いてはいない。それは口に出しては言えないほど深く秘められた個人的な事柄であったからであろう。「ルース」の最後のスタンザにおけるルースへの語り手の特別な憐憫の情は、このことと深く関係しているといつてよい。つまり、それは妹ドロシーのみならず、フランス革命で置き去りにしてきたアネットへの鎮魂歌でもあったと思えるからだ。

### 註

- (1) Cf. Christine L. Krueger, “Literary defenses and medical prosecutions: Representing infanticide in nineteenth-century Britain” (*Victorian Studies* 40:2, Bloomington, 1997), pp. 271-94.
- (2) 上島健吉解説注釈『リリカル・バラッズ (III) ——人と社会——』(研究社小英文学叢書、1993) 以下本文の引用および行数は、断らない限り、オリジナルなこのテキストに基づくものであり、上島氏の註解への言及も同版による。
- (3) 拙著『「岬」の比較文学——近代イギリス文学と近代日本文学の自然描写をめぐって』(英宝社、2006)、pp. 144-59 および pp. 210-39 を参照されたい。
- (4) Cf. *Op.cit.*, Christine L. Krueger, “Literary defenses and medical prosecutions: Representing infanticide in nineteenth-century Britain,” pp. 271-94.
- (5) Ernst Emsheimer, “Tongue Duct Flutes Corrections of an Error,” *The Galpin Society Journal*, vol. 34; Mar. 1981, 98-105.
- (6) *Lyrical Ballads* 再読(1) (近畿大学文芸学部論集『文学・芸術・文化』22 巻1号、2010.09) 参照のこと。
- (7) 和田勇一・福田昇八訳『妖精の女王』第一巻(ちくま文庫、2005)を参照した。
- (8) A.A. Markley, “Wordsworth’s Ruth” (*The Explicator*, Fall 2005, 64-1), pp. 26-29.
- (9) Walter Scott (Edited with glossary by Thomas Henderson), *The Minstrelsy of the Scottish Border* (George G. Harper & Company LTD., 1931)
- (10) James H. Averill, *Wordsworth and the Poetry of Human Suffering* (Cornell University Press, 1980), p. 204. 以下 Averill の本書からの引用については、同版を用い、引用箇所には頁数のみを付す。
- (11) この歴史的事実については、筆者はアメリカ人の友人でアメリカインディアンを友に



持つ James Morton 氏自身の証言を聞いた。ちなみにこの Morton 氏は小説家 Nathaniel Hawthorne の短編 “The May-Pole of Merry Mount” に登場する悪漢と呼ばれる男のモデルとなった祖先の Thomas Morton の血を引いている人物である。さらにはインターネット上で、この事実に基づく証言が取り上げられ公表されていることも知った。たとえば、“Loyalist (American Revolution)” というタイトルで、アメリカ独立戦争時の王党派として知られる人々に関する記事が取り上げられ、この事実の証言となっている。Cf. <http://www.redcoat.me.uk/loyalists.htm>

- (12) Isabella Fenwick Note in E. de Selincourt ed., *The Poetical Works of William Wordsworth*, I (Oxford University Press, 1940), p. 330.
- (13) William Bartram, *Travels and Other Writings* (original, 1791; rpr. The Library of America, 1996), pp. 67-68. 以下本論での本書からの引用はすべて同版に拠り、引用の後に頁数のみを記す。

#### 参考文献

- John O. Hayden ed., *William Wordsworth: The Poems, Vol. One* (Yale University Press, 1977)
- 上島健吉 解説注釈『リリカル・バラッズ (III) ——人と社会——』(研究社小英文学叢書、1993)
- E. de Selincourt ed., *The Poetical Works of William Wordsworth*, I (Oxford University Press, 1940)
- Christine L. Krueger, “Literary defenses and medical prosecutions: Representing infanticide in nineteenth-century Britain” (*Victorian Studies* 40:2, Bloomington, 1997)
- A.A. Markley, “Wordsworth’s Ruth” (*The Explicator*, Fall 2005, 64-1, 26-29)
- James H. Averill, *Wordsworth and the Poetry of Human Suffering* (Cornell University Press, 1980)
- Walter Scott (Edited with glossary by Thomas Henderson), *The Minstrelsy of the Scottish Border* (George G. Harper & Company LTD., 1931)
- Geoffrey Chaucer, “The Tale of Sir Thopas” in *The Canterbury Tales*.
- A.C. Hamilton ed., Edmund Spenser, *The Faerie Queene* (original, 1590-96; Longman, 2007)

和田勇一・福田昇八訳『妖精の女王』(1～4巻)(ちくま文庫、2005)

William Bartram, *Travels and Other Writings* (original, 1791; rpr. The Library of America, 1996)